

苦悩の物語に直面すること

—仏教学と社会的実践について語る視点—

箕浦暁雄

大谷大学

現代社会における仏教の果たすべき役割ということを問題にすると、積極的に社会参画しようとする仏教教団の新たな動向や僧侶個人々の活動に注目が集まってきた。エンゲイジド・ブuddiズム (Engaged Buddhism) などの活動である。それらの活動がどのような発想に基づいて開始されてきたか、まずは注意深く捉えておく必要がある。そのうえで、〈社会的実践〉について語り始めるときの重要な視点が何であるかについて、仏教思想史のなかでも比較的初期の段階における仏陀観に基づいてあらためて確かめてみたい。

仏伝のなかの四門出遊の物語や、初期経典のなかに描かれている釈尊に出会う人々の物語を通して、仏教の思索は当初から様々な苦悩の現場から紡ぎ出され編み上げられてきたものであると言える。仏典では、釈尊の思索の方法論が先に示されるのではなく、様々な苦悩の現場がまずあって、そこから立ち上がってきたものという構図でしばしば描かれている。つまり、仏伝や経典における物語の描き方を見ると、〈苦悩の物語に直面すること〉に端を発して思索が開始されるというかたちをとっている。このような構図それ自体が、仏教思想の根底にある臨床的態度を如実に表していると言っ

てよい。

たとえば、仏典では、他者の苦悩に直面し、それに感応・応答 (response) する人の姿がしばしば描かれている。そこで示されるのは、自分の存在が根底から揺さぶられ、自己のあり方を根本的に問い直さなければならなくなるという経験なのである。そして、その苦悩には原因がある。苦悩を超える道がある。このように提示されることで、経験されたことに責任 (responsibility) を担うということが問われていることになる。

現代社会において、仏教学はいかにあらねばならないか。また仏教に学ぶ者にとって、社会の一員としてあるとはいかなることか、社会的実践とはいかなることなのか。このように問い始めるとき、仏典の物語のなかにこそ、欠くべからざる重要な視点を見いだすことができる。仏教の思索の原点が苦悩の現場にあるということを十分重く受けとめるなら、思想研究としての仏教学もまた、様々な社会的役割によって引き裂かれないひとりの人間として〈苦悩の物語に直面すること〉をきっかけとして自己が根底から問い直される経験を、その思索の出発点としなければならないであろう。他方、苦悩の現場に立ち、いかにそれに応答するか、という視点なしに、現代社会の様々な局面で暴力的に何らかの実践と呼ばれる行為が要求されても、それは仏教の実践たり得ない。

キーワード: エンゲイジド・ブuddiズム、応答と責任、四門出遊